

書 評

D・R・コネクタス譯『文選』第一卷・第二卷

プリンストン大學出版局

第一卷 一九八二年・六四一頁

第二卷 一九八七年・四一三頁

Wen Xuan or Selections of Refined Literature

Translated, with Annotations and Introduction by

David R. Knechtges

PRINCETON UNIVERSITY PRESS

(Princeton Library of Asian Translations)

文學作品の翻譯が必然的に内包する困難については多言を要すまい。だが、六世紀に編まれた中國古典文學の規範たる『文選』を英語に全譯しようとするこの試みの引き受けた困難が、通常をはるかにこえたものであることは、やはり言っておかねばならないだろう。そして、譯注者である David R. Knechtges ワシントン大學教授が、眞摯かつ

誠實にこの仕事を行われていることに、我々は深い敬意の念を抱かざるを得ない。

ここに論評するのは、これまでに出版された第一卷および第二卷である。第一卷は『文選』卷一から卷六に收められる「京都」の賦を、第二卷は同じく卷七から卷十二にかけて收録される「郊祀」「耕藉」「畋獵」「紀行」「遊覽」「宮殿」「江海」の賦を英譯し、見開きの左頁に Knechtges 氏による注を、右頁に譯文を載せるという體裁を取っている。必要に應じて地圖や建物の配置圖を載せ、それぞれの作品の前には成立事情や背景を説明する解題を付す。また各卷の冒頭に Introduction を置き、第一卷はさらに Preface および Note on the Translation をその前に付す。

第一卷の Introduction は七十頁にもおよぶ綿密なもので、この英譯全體の總説となっており、「中國初期ジャンル理論とジャンル別詞華集の始まり」「蕭統の生涯と『文選』の編纂」「梁代の文學環境と蕭統の文學觀」「『文選』の内容」「『文選』研究と版本」の全五節から構成されている。各節の表題からも明らかのように、『文選』を多少なりとも

専門的に讀もうとする者にとってまず心得ておくべき領域は、確實に押さえられていると言つてよい。そしてその記述は、これまでの漢魏六朝文學研究の成果を文字通り洋の東西を問わず十分に取入れ、必要に應じて著者自身の見解をも盛り込み、また、優に四十頁をこえる注が卷末に付されているのを見てもわかるように、参照文獻も詳細に提示されており、利用價值はきわめて高い。ことにその中核を占める『文選』の内容の一節は、たんなる收録作品の解説にとどまることなく、はじめに『文心雕龍』のジャンル分けとの對照表を掲げるように、『文選』における分類基準あるいは收録基準の問題を根底におきつつ、その類目に即してそれぞれの作品や作者に具體的に言及していくもので、そこには、『文選』という書物を、個々の作品の寄せ集めとしてではなく、一つの有機體として捉えようとする Knechtges 氏の姿勢が鮮明にあらわれているよう。この Introduction は、ひとり英譯にかぎらず、『文選』という書物を前にしたすべての讀者のための恰好の Introduction となっているのである。

書 評

さて、このように總説的な第一卷の Introduction に対し、第二卷のそれは、the alliterative and rhyming descriptive binomes すなわち雙聲疊韻の語を翻譯する上で生じる問題を中心に論が展開される。雙聲疊韻の語についてはすでに第一卷の Note on the Translation でその扱いにくさが言及されているが、ここでは、Arthur Waley から Knechtges 氏に至るまで、これまで賦の翻譯を試みた人々の見解や譯例を提示しつつ、いわば歐米における雙聲疊韻翻譯小史の體裁をとって、より詳しく論じられている。Knechtges 氏の總括によれば、雙聲疊韻語に對する態度には、おおむね三段階を見出すことができる。すなわち、第一が一九二〇年代、Waley が司馬相如の賦を翻譯するさいに、これらの語を翻譯不能としたこと (*The Temple and Other Poems*, New York, 1923)。これが雙聲疊韻の語の注目の最初であつたとする。第二は、この Waley の見解以降あらわれた司馬相如の賦の三種の歐語譯、すなわち Erwin von Zach の獨語譯 (1928; rpt. *Die Christische Anthologie*, 1958)、Burton Watson の英語譯 (1961; rpt.

Chinese Rhyme-Prose 1971) Yves Hervouet の佛語譯 (Le Chapitre 117 du Che-ki, 1972) である。以上四種の歐語譯について Knechtges 氏は、まず雙聲疊韻の翻譯という課題に對する認識を示したことが自體は評價しつつも、Waley・Watson・Zach の三者がいずれもこれらの語を翻譯不能なものとして扱ったことを惜しみ、唯一、Hervouet 譯において雙聲疊韻語翻譯の積極的な取り組みが行われている點に注目している。そして、James Robert Hightower が Hervouet 譯の書評 (*Orientalistische Literaturzeitung* 73, Berlin, 1978) のなかで、その不備な點を鋭く指摘し、より緻密な分析を加えたことをもって、第三の現段階へ至る重要な過程とみなしている。結果として、英單語二語と雙聲疊韻の語にあてるとどう Knechtges 氏の採用した翻譯法のちががけとなったのは、Peter A. Boodberg “Cedules from a Berkeley Workshop in Asiatic Philology” (*Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 7. 2, 1969) やあるが、Knechtges 氏はこの方法について、英語の單語一つ一つが漢字二字にそれぞれ對應するというのではなく、むしろ音調の上での

効果 (euphonic effect) に重點を置いた結果だと説明する。むしろ譯語の選定にあたっては、舊注や清朝考證學の成果はもとより、Knechtges 氏自身の細かな検討を経てその意味が同定された上でなされるのであり、また、その音價については、李方桂・W. South Coblin・丁邦新・羅常培・周祖謨らの業績が、該當する時代に應じて利用されるという周到さである。そして、この周到さを支えている Knechtges 氏の熱意は、漢賦の讀みがたちを用字の複雑さに歸す『文心雕龍』練字篇を引いた後で、以下のように述べられる言明からも、うかがうことができる。

In spite of Liu Xie's sobering comments, which confirm what Waley, Watson, and Hervouet have said about the difficulties of understanding these “precious words,” I am foolish enough to suggest that one attempt to produce English equivalents that represent as closely as possible the function and meaning of these words in the Chinese original. 劉勰の穩當な意見は、Waley や Watson 甚だ Hervouet

らがこれら「瑋字」の理解しがたさについて語ったこととの裏付けとなるだろう。にもかかわらず、私はあえて、中國語の原文におけるこれらの語の機能と意味をあたうかぎり嚴密にあらわす等價の英語を得ようとする試みについて語ろう。

ここには、Knechtges 氏のこの譯業全體に對する姿勢が端的にあらわれているだろう。そもそも、この雙聲疊韻語の問題にしても、たんなる翻譯技術上のことではなく、賦という中國獨特の文學をどのように翻譯するかという課題の一環として、論じられているのであって、それは譯者の賦に對する考え方と密接に關わっているのである。しかも、Knechtges 氏の研究領域は、つとに知られるように、漢賦を中心とするのである。

漢字文化圏の外側に暮す人々にとっては、まず賦というジャンルを何と呼ぶかがすでに問題である。詩とも言えず散文とも言えず、まして小説などではなく、形態的にも内容的にもまさに賦としか呼びよのないものを、いったい

何と呼ぶべきか。そこには必然的に人それぞれの賦に對する解釋が反映されるだろう。英語においても「賦」はさまざまな譯語を與えられてきたが、やはり rhyme-prose と rhapsody の二つが代表的である。前者は、たとえば前出の Watson 譯の賦の選集がその表題に冠して用いているが、Watson 氏によれば、「押韻散文」というこの譯語は韻散合戚という賦の外形的特徴に着目したものである（ただし、これについてはすでに清水茂「賦と敘事詩」が疑問を提出し、もとは「有韻の文」の直譯であろうと言う。なお上記論文は、同『語りの文學』（筑摩書房、一九八八）に再收）。Watson 氏のこの書は、氏自身賦の文體をスポーツの實況中繼にたとえていることからもうかがえるように、ある對象を、適度に押韻する快いリズムをもった文體にのせて描寫する點に賦の特質をみている。

一方、Knechtges 氏は「rhyme-prose 以外にも」、「prose poem」、「poetic essay」、「poetic description」などの譯語をあげたうえで、rhapsody という譯語を採用している。もともと古代ギリシアの敘事詩を指すこの語を「賦」の譯

にあてることについて、Knechtges氏自身は、揚雄の賦を論じた *The Han Rhapsody* (Cambridge, 1976) のなかで、すでにその理由を述べている。すなわち、「賦」の發表形式、つまりそれが「詩」のように歌われたのではなく朗誦されたことが、ちょうど敘事詩が吟遊詩人によって吟唱されたごとくだ、というのである。これは、「賦」という語の原義にまで遡り、その特質が第一義的には朗誦性にあると見なしての結論である（ちなみに前掲清水論文も賦の特質を「かたる」ことにあるとし、古代ギリシャの敘事詩との共通性を指摘する）。そして、賦の作者が、いろいろな面で吟遊詩人と共通の性格をもち、賦がしばしば恍惚や莊嚴、激情を述べたてる点でも敘事詩と似かよっている、とするのである。ひと言でいえば、韻散合成という賦のいわば表面上の形式をあらわす rhyme-prose に對し、rhapsody の方は、賦の享受や内容の上での特質をも視野に含めた総合的な命名といえ、このような觀點の違いは、當然ながら譯文そのものからも看取される。いま司馬相如の「上林賦」を例に、兩者の譯文を比較してみよう。

亡是公が上林苑を流れる川のさまを描寫して、次のようにいうくだりがある。

渾弗沍沍、偃側泌瀨。橫流逆折、轉騰激洌。滂濞沆漑、穹隆膠輳。宛渾膠輳、踰波趨湍。汨汨下瀨。批巖衝擁、奔揚滯沛。

ここは雙聲疊韻を驅使し、四字句を連ねて一氣呵成に述べ立てる部分だが、これを Watson 氏は次のように譯している（ただし引用部分は Watson 譯の分段には一致していない）。

Jostling and eddying in great swells
That surge and batter against each other;
Darting and twinsting
Foaming and tossing,
In a thundering chaos;
Arching into hills, billowing like clouds,
They dash to left and right,
Plunging and breaking in waves
That chatter over the shallows;
Crashing against the cliffs, pounding the em-

bankments.

(第二卷、七七—七九頁)

The waters pile up and reel back again,

(前掲書、三八頁)

Watson 氏の譯は全體的にセンテンスが短く、一句一句の嚴密な意味よりは、全體の流れをつかむことに重きをおいてゐるやうに思われる。

Knechtges 氏の譯は次のやうになる。

Spurting and spouting, rushing and racing,
Pressing and pushing, clashing and colliding,
Flowing uncontrolled, bending back,
Wheeling and rearing, beating and battering,
Swelling and surging, troublous and turbulent.
Loftily arching, billowing like clouds,
Sinuously snaking, twirling and whirling,
Outracing their own waves, they rush to the chasms,
Lap, lap, they descend to the shoals,
Striking the bluffs, hurtling against the dikes,
Racing and swelling, spraying and spuming.

書評

きやく第二卷 Introduction に論じられたやうに Watson 氏が一語として譯していた雙聲疊韻語を Knechtges 氏が and でつながれた二つの單語に譯していること、一目瞭然であり、全體を見ても、一句一句に忠實な譯と言えるだらう。

ここでいささか回り道になるが、日本における賦の翻譯に目を向けてみよう。『文選』の賦の翻譯についていえば、我々はほとんど對照的ともいえる二つの業績をあげることができる。小尾郊一『文選(文章篇)』一・二(講談社『全釋漢文大系』二六・二七)と、中島千秋『文選(賦篇)』上(明治書院『新釋漢文大系』七九、ただし「吳都賦」まで)である。

小尾譯は、譯文も簡潔にまとめられており、その特徴として、特に假想人物を用いた作品において人物の對話という枠組みを重視していることをあげることができよう(小尾氏は「漢賦における娛樂性」〔廣島大學文學部紀要三四〕などこのことを論じている)。そのため、登場人物の語りの部分は、すべて「です・ます」調で譯されることになる。

また、雙聲疊韻についていえば、「澤弗宓汨」が「ざざつと去って行き」、「泣泣下瀨」が「ごうごうと瀨を下る」といったぐあいに、雙聲疊韻語の意を細かく分析するよりは、そのまま日本語のオノマトベに移しかえる方法をとっている。注を施すにしても、たとえば「宓汨」を「去ることの速いさま」、「泣泣」を「水聲」とするように、舊注をそのまま用い、それ以上の分析はおこなわない。どちらかといえば、Watson 氏のように、個々の語の意味よりは全體の構成を重視した翻譯と言い得る。

一方中島譯は、あくまでも原文の「意味」を正確に確かむことを目標としているように思われる。中島氏自身、自著『賦の成立と展開』（關洋紙店印刷所、一九六三）の序で、それまでの賦研究が表現形式や修辭の面に偏っており、作品の具體的な内容が輕視されていることを批判しているが、その姿勢がこの翻譯にもあらわれている。そのため譯注ともに小尾氏のそれより量が増え、譯文そのものにも説明的表現がはいり込んでくる。端的な例としては、張衡「東京賦」で平樂觀を形容した「瑰異譎詭、燦爛炳煥」の二句が、

「人工とも思われないそのあやしき、生き物らしく見えるその變化、きらきらと輝くその清淨な光、ありありと見えるそのあざやかさ」と譯され、さらに「餘説」の欄で「上の句は人工とも思われず、まるで生き物のように見えるさまであり、下の句は、清淨な輝きがありひときわ形がはっきりしたさまである。つまり人工のものは死んだ裝飾的細工としか受け取れないものだが、そうでなくて、むだな細工やむだな色彩もなく、生き生きと動くさまに見えるのは造化に等しく、清淨な輝きは儉約質朴にも等しいと言うのである」と説明される。ちなみに小尾譯ではこの部分を「見るものすべて珍しく怪しく、きらきらとあかあかと輝いています」とするのだが、ここでも、中島譯がより分析的な譯をおこなっていることが了解されよう。

ふたたび Knehtges 譯に目を轉じよう。ここでは、雙聲疊韻語が二つの單語として譯され、その限りでは中島譯の方向に近い分析的な翻譯といえる。ただ前述のように、それは雙聲疊韻語を一字一字の漢字に分解して Knehtges 氏が理解しているためではなく、「韻頭もしくは同義語反

復によって、中國語の音調の上での効果をいくらかなりとも傳達するため」である。中島氏が専ら意味の把握のみに意を用いているのに對し、Knechtges氏は、雙聲疊韻語の音楽的側面をも譯文において再現しようとするのである。

そしてそれは、前掲の譯文を見ても明らかのように、十分に成功している。中島氏の譯が、意味を明らかにしようとするあまり、注釋を譯したような説明的な文章になってしまい、賦の本文からはむしろ遠ざかっているのに對し、Knechtges氏の譯では、同義語の反復が意味を鮮明に指示する一方で、語頭に同じ子韻を繰り返したり、語尾に-ingなどを多用すること、氏自身は“ I have not tried to use rhyme in translating rhyming binomes ” (第一卷 Note on the Translation) と韻文譯を意圖していないにもかかわらず、賦の音楽的效果をも十分に表現し得ている。

一方、この方法は、小尾譯の、雙聲疊韻語をそのまま日本語のオノマトベに移しかえる方法とも異なっている。小尾氏がこれらの語をあくまで二字で一單位と見ているのに對し、Knechtges氏はそれを一字ずつばらばらに解釋する

ことは拒否しながらも、注釋の中で、その構成をさらに細かく分析しようとする。例えば、前掲引用文中の「必泊」の語につけられた注釋は、次のようなものである(ただし雙聲疊韻語に對するこのような注釋は、もっぱら第二卷に顯著である)。

Myu 必泊 (**mjet-gjuet*) is a rhyming binome. The significant element probably is *yu*, which is the same as the *yu* 晏 in the *Shuowen* [説文] (11B. 51 42a-43a), which conveys the meaning of swift movement; hence, my “rushing and racing.” See *Fangyan shuzheng* [方言疏證] 6. 4b.

こゝでは、*yu* の音が「必泊」の語の意味を規定していると述べて、そこから“rushing and racing”の譯を導きだしたと言う(このように二字のうちの一文字がその語の意味をつきとめる手がかりになることが多いという考えは、すでに第二卷 Introduction で述べられ、ひとつの方法として提示されている)のだが、小尾譯のように舊注の「必泊、去疾也」といった

表現をそのまま用いるのではなく、いったんより基本的な單位にたちかえって檢證しようとする姿勢が看取されよう。要するに、全體の流れを重んじた Watson 譯とは對照的に、Knechtges 譯は、賦の構成要素となる一語一語、一字一字に對して、あたう限り綿密な考察を加えた翻譯なのである。

この姿勢は雙聲疊韻語に關してだけでなく、本書の隅隅にまで浸透している。Knechtges 氏の翻譯の重要な特徴は、何といつてもその膨大な量の——時には譯文に數倍する——注釋であるが、それもこの姿勢の産物と言えよう。動植物にはすべて學名をつけ、天體の記述には必ず天文學上の呼稱を併記する。城郭、建築等の専門的領域には、それぞれ分野の參考文獻を掲げ、自ら「This version of the *Wen xuan* is a reference work as well as a translation」(第一卷 Note on the Translation)と述べたまことにその通りのものになっている。それは、もはや譯文を補うための注釋ではなく、むしろこの膨大な注釋を支えに譯文が成立しているとみなすべきであろう。

Watson 氏に従えば、賦というものははじめから一つの全體であり、一度開始されれば休むことなく一氣に最後まで語り續けられねばならない。ところが Knechtges 氏によれば、賦とは、音と意味を持つ中國語の單位を、そしてそれを示す漢字を、一つ一つ積み上げていくことによって成立する、壯大な建築物なのである。そして Knechtges 氏によるこの譯業は、そのような賦觀のもとに究極まで推し進められた、いわば漢賦の翻譯の一つの極點を示している。

もっとも、一つの考え方をここまで徹底して推し進めれば、別の側面が閑却されてしまうこともまぬがれがたい。一字一字を丹念に譯している Knechtges 氏も、賦の句型については、無視に等しい扱いをしている。

たとえば、「兮」字を用いる騷體と用いない散體とでは、おのずとその内容にも差が生じ、漢賦の展開を考える上でも、句型と内容の連關は重要な意味を持つ。Knechtges 氏は『*Two studies on the Han fu* (Seattle, 1968) において賈誼「弔屈原文」「旱雲賦」・揚雄「反離騷」を論じたさい、

句型や韻律について付録を設けて細かく検討し、前掲 *The Han Rhapsody* ではより総合的な観点からこの問題を取り上げていたので、あるいは重複を避けたのかも知れない。

だが、この英譯には原文が附載されず、また Knechtges 氏がいかに一字一字を丁寧に譯出しているとはいっても、譯文を見ただけで原文の句型がわかるようにはなっていない以上、それぞれの賦の句型についても何らかの言及がほしいところである。それは讀者にとって有益な示唆となるはずである。

例をあげるなら、揚雄「甘泉賦」は、題材は敘事的でありながら「兮」字を用いる騷體を基調にしているのだが、そのことは言及されない。また、班固「兩都賦」の末尾に付された五篇の詩は、前の三つが詩經に倣った四言體、後の二つが楚調で書かれているが、これも譯文を見ただけでは區別のつかないことであり、注釋の中でふれる必要がある。さらに、王延壽「魯靈光殿賦」は、亂辭において「○○○○、○○○○、○○○○、○○○○兮」という獨特の句型を用いているが、これが楚辭に似てはいるがそのままの形では

見られない句型であること、さらには三字一連の構成が、中國古典文學においては一つの破格であることなどにもふれてほしかった。ちなみに Watson 氏は、前掲書において『荀子』賦篇の抄譯を付録として載せるにさいし、それらがすべて四言句を基調にしていることを指摘している。

さらに、作品の構成と押韻との關連についても、Knechtges 氏は讀者への注意を怠っているように見うけられる。第一卷では、押韻についてはまったく言及せず、第二卷に至って、換韻の箇所で行分の空白を入れるという手法が見られるようになるが、ひとつの作品の中においてさえ、必ずしも一貫せず、また、その空白にどのような意味があるのかについて譯者自身の説明もないのである(換韻の箇所では空白を入れるという方法は、あるいは Ts'ung pao 71 [1985] に掲載された書評の示唆によるものかもしれない)。また、そも Knechtges 譯では、それぞれの賦は内容にしたがって章わけされ、原則として一句一行の體裁をとって句ごとに通し番號が振られているのだが、この章わけについても、譯者の説明はまったくないのである。行番號を振ることに

ついては、原文を載せることが紙幅の面で不可能な場合の次善の策であろうし、原文との対照の点からいっても十分に利点がある。慾を言えば、Nach 譯が六臣注本の葉數を付すように、胡刻本の葉數を付記してもらえれば萬全となるうが、いずれにせよ、とくに説明が必要なことではない。だが、章わけとなると、それ自體は譯文の読みやすさの面で歓迎すべきことではあろうが、わざわざ原文にはない章番號まで掲げる以上、これも譯者自身によるひとつの解釋なのであり、なんらかの説明があってもよいのではない。少なくとも、作品構成の解釋上問題になりそうな箇所でのコメントは、必要ではないか。

たとえば、第二卷所收の班彪「北征賦」を Knechtges 氏は第六章に分けるのだが、その四章と五章との分章（二六九頁）は、おそらく議論のわかれるところだろう。すなわち、「飛雲霧之杳杳、涉積雪之皚皚」（六九・七〇句）以下を Knechtges 譯は第五章とするのだが、この部分は「隣高平而周覽」（六三句）から續く風物と心象とが混然一體となった情景描寫であり、第四章冒頭の「登鄣隧而遙望兮」（五一

句）以下の文帝の德をしのぶ敘述と對照をなしていることを顧みれば、むしろ六二句と六三句との間で章をわかつ方が妥當とは言えまいか。ちょうどこの「飛雲霧之杳杳、涉積雪之皚皚」兩句について、Knechtges 氏は、上句の主語が「雲霧」、下句の主語が作者であるとして、對句であるにもかかわらず主語のくいちがう譯（: As the dark gloom of clouds and mist scuds past, / I trek the glistening whiteness of drifting snow.）をおこなった理由を細かく説明しているが、であればこそ、斷章の根據についてもふれてほしいかった。

むしろ、Knechtges 氏の譯文および注釋は、總じて、正確かつ適切なものであり、たとえば、張衡「東京賦」に「故函谷擊拆於東、西東顛覆而莫持」（七四六・七四五句）とあるのを、

Thus, though they sounded their clappers at Han Valley in the east,

The western court toppled with no one to prop it up.

と譯すのは、日譯がいずれも舊注にならずで「撃拆」の主語を王莽とし、前後の文脈が通じにくい譯文となっているところである。Knechtges氏は、王念孫『讀書雜誌』もしくはそれを引く高步瀛『文選李注義疏』の議論を踏まえて舊注をしりぞけ、より合理的な解釋を示したのだが、目配りの廣さの點でも、譯注の水準を示す顯著な例となろう。

また一方で、獨自の見解を示すことも少なくなく、たとえば、班固「東都賦」の第一三・一四句、胡刻本が「功有横而當天、討有逆而順民」とするのを、五臣本に従って「功」を「攻」に改めるとした上で (Knechtges 氏の注だけによれば、さらに「討」を「計」に改めたように讀めるのだが、譯文はそうではない。いささか説明不足)、從來の「功は横ざまなること有れども天に當たり、討は逆らうこと有れども民に順う」という訓みに對し、「有横」「有逆」を「有罪」「有道」などの語と同じように「有」を“possessors”の意にとつて二字ひとまとまりでとらえ、

by attacking the tyrannical, he responded to the will of Heaven. By punishing the traitorous, he

obeyed the wishes of the people.

という譯を提示する。校勘上の問題はなお残るものの、後の文脈から考えれば十分に説得力をもつ解釋と言えよう。

とはいえ、誤譯と思われる部分、必ずしも賛成できない箇所も、ないわけではない。たとえば、左思「魏都賦」のなかに「莫黑匪鳥、三趾而來儀。莫赤匪狐、九尾而自援」(五五三—五五六句)という句があり、これは『詩經』邶風・北風の二句、「莫赤匪狐、莫黑匪鳥」をそのまま用いたものなのだが、Knechtges氏はそれぞれ

Nothing is blacker than the crow (五五三句)

Nothing is redder than the fox (五五六句)

と譯す。これは、注にも記されているように、Waley 譯『詩經』の譯文に忠實にしたがっているのだが、通常は「黒いものはみな鳥、赤いものはみな狐」という意味で解されており、語法の上からも、この譯を採用したのは納得しがたい。また、左思「吳都賦」の「包括于越、跨躡蠻荊」(五四・五五句)の二句を譯して、

It encompassed Yuyue,

Straddled the jing and Man.

とするが、この「蠻荊」は「荊蠻」を脚韻のために轉倒したもので（しばらく『李注義疏』による）「荊の蠻」の意であり、「荊と蠻」ではおかしく、しかも上句との對もなさない。また、司馬相如「子虛賦」の終わり近く、烏有先生が子虛のお國自慢をたしなめていう「竊爲足下不取也」（二三〇句）の句を、氏は

If I were you, I would not have adopted such a course.

と譯している。つまり「爲」を平聲でよむわけだが、ここは Watson 譯が

For your sake, I cannot help wishing you had not done this. (前掲書、三六頁)

とするように、去聲でよむ通常の解釋がやはり妥當だろう。さらに、先行する注釋を參照するさいに、不備が見られることもある。「魏都賦」の「内則街衢輻輳、朱闕結隅」（三五・三五四句）には「鄴城内諸街、有赤闕黑闕正當東西南北城門」との張載注（「魏都賦」の注者を劉淵林ではなく張孟

陽とすることについては、「三都賦」の解題でふれられる）があるが、胡克家『考異』によれば、「黑」を「里」に作り、「有赤闕里、闕正當……」のように讀むべきところである。Knehtges 氏も『考異』を參照せよと述べておきながら、張注の譯は

all of the streets have red watchtowers and ward watchtowers that directly face the east, west, south, and north gates of the city.

となっており、文字の校訂は反映されている一方で、句讀の改訂がおこなわれていないのは、理解しがたい。

これだけの篇幅をもつ書物であり、また執筆に長い時間がかかっていることを考えれば、やむをえないことではあるが、譯語や注釋の不統一も散見される。たとえば、「魏都賦」に「土無綈錦」（二二二句）とあるのを

The walls have no pongee or brocade.
と譯すその注に、

I assume with Zach that *tu* 土, "earth" refers to "walls."

と述べ、さらに張衡「西京賦」の三二三句を参照するように断っているが、實際に「西京賦」の該當箇所、すなわち「木衣綈錦、土被朱紫」の譯を見ると、三二四句の「土」を“ground”と譯してあり、齟齬の感をまねがれない。

「西京賦」のこの箇所の参照を要求するのが、李善注に「西京賦曰、木衣綈錦」とあるのにしたがったに過ぎないと思えば、いささかおざなりで、本譯注に似つかわしいとは言えまい。せっかく譯出に工夫が見られるのだから、いますこし相互の對應關係に留意してほしかった。また、英譯第二卷に收録される「甘泉賦」の「飛蒙茸而走陸梁」（二二句）の注において、Knechtges氏は、「陸梁」の文字自體は意味を捉える手がかりにならないとした上で、この語が無秩序な動きを描寫するもので、「陸」は「陸」に通じるとし、その例として郭璞「江賦」の二〇三句（夔拊翹陸於夕陽）をあげる。この指摘自體はたいへん示唆に富み、Knechtges氏ならではのもののだが、「陸梁」の語については、第一卷の「西京賦」にすでに「怪獸陸梁」（七一三句）という用例があり、それにまったくふれないのは不可解である。ちなみに、「西

京賦」の「怪獸陸梁」が“Strange beasts wildly capered about”と譯されるのに對して、「甘泉賦」の「走陸梁」は“run leaping and lurching”と譯されており、第一卷に比べて第二卷の方が、より雙聲疊韻語の翻譯に注意をはらっていることがうかがえる。その一方で、「西京賦」においては、注釋のない「陸梁」に對し、ちょうどその直前にあらわれる「曼延」について、その原義やそれがどのような出し物であったかを一頁近いスペースを費やして論じ、王國維『宋元戲曲考』をはじめとする三種の參考文獻を該當頁まで明記して示すように、やはり重點のおきかたが第二卷とは異なるように見うけられる。もちろん、そのこと自體は何ら非難すべきことではなく、作品の性格に柔軟に對應してこそ眞の注釋であると評者も考える。ただ、用例の把握がつねに必須の作業であることも、また事實であろう。多くの場合、Knechtges氏が新しい解釋を示す時には何らかの説明が同時になされ、それもまたこの譯注の利點のひとつだが、時にその原則を逸脱することがある。たとえば、張衡「南都賦」の二四二・二四三句、「未覩其美者、

焉足稱舉」を、

But one who has not beheld such beautiful things,

How can he fully describe them?

と譯すのは、李善注の「言此游觀耳目之樂、非極美也」もしくは劉良注の「言未覩南都之美、何足爲稱游觀耳目之事、將述置南陽之意、故設此詞」のいずれの解釋とも、また、それらに基づいた日本語譯とも異なっており、何か注釋がほしいところである(Knechtges氏は日譯をしばしば參照し、また批判している)。また同じく「南都賦」の三二三句、「豈不思天子南巡之辭者哉」は、從來「豈に天子南巡の辭を思わざる者あらんや」と訓まれ、呂延濟注にも「豈曰不思天子之歌辭哉」とあるところを、Knechtges氏は

Don't these words express a wish for the Son of

Heaven to tour the south?

と譯す。一考の餘地があるだけに、ここにも注譯がほしいように思う。

さて、最後に本書の全體の構成について話を戻そう。卷

末には、Biographical sketches 及び Bibliography として最後に Index が付されている。第一卷の場合には、Note on the Translation および Introduction の注が、Bibliography の前に挿入されている。Biographical sketches は、その卷ではじめて登場した作家の傳記を略述したもののだが、その文學活動、とりわけ、『文選』に收録されたその作者のすべての作品に言及し、それが作者の人生のどのような時期に書かれたものかを説明することに意を用いている。まさしく、『文選』の讀者のための、作者小傳となっているのである。またその末尾には、基本的な參考文獻が丁寧に挙げられているが、各國語に通じている編者の手によるものだけに、中國、ヨーロッパ、日本それぞれの研究が參照されており、この部分だけでも利用價值は高いだろう。そのことは、膨大な Bibliography についてもあてはまる。第一卷の Bibliography では、『文選』のテキストおよびその翻譯の一覽がまず掲げられ、ついで譯注で言及された中國・日本の文獻、最後に歐語による文獻が原則として著者名のアルファベット順（中國音に關しては、Knechtges 氏は拼音を

採用する⁽²⁾で配列される。この中國・日本とヨーロッパとを分ける方法は、おそらくその分量の膨大さによるものである。第二卷では、第一卷に挙げられた文獻が再録されなかったために分量がかなり減り、中・日・歐がひとつにまとめられていて、この方がはるかに見やすい。ただ、第二卷に言及されている文獻の場合、第一卷と第二卷と兩方の Bibliography を参照しなければならぬわけで、これが第三卷、第四卷となった時には、その煩雜さは相當なものとなろう。おそらく全卷完結のさいには、通卷の Bibliography も作成されるであろうし、またそれを切に望むが、残念ながらそこに至る時間は決して短いものではないだろう。この Bibliography が、中・日・歐いずれの研究者にとっても有用であるだけに、何らかの方策が立てられることを期待したい。

また、Index は、人名、地名などの固有名詞、および注釋でとりあげた語を採録の對照とし、宮殿名などはしばしば譯語と拼音兩方を見出しにあげ、Changzhou, see Long Isle Park などのように拼音から譯語へ參照する方法を

とる。ただ、漢字の併記はなく、同音語の場合などは、英語で意味を付して區別ができるようにしている。さらに、頻出する人名や地名などについては、必要に應じて、たんに頁數のみならず、どのような形で言及されているかも簡明に示しているが、これはひとつの工夫と言えよう。いまのところ各卷ごとに索引がばらばらになっているのはやむをえないが、Bibliography と同様、全卷完結のおりにはぜひ總索引のかたちでの提供を望みたい。そのさい、できれば漢字併記も検討してほしい。

いくつかあげつらいはしたものの、これも Knechtges 氏の譯注の水準の高さゆえに評者の慾が張ったもので、そのためにこの書物の價值が減じることなど決してない。第一卷の Preface で氏は、『文選』と取り組んで十五年以上の歳月を閲し、その全譯に取りかかって三年と言うが、この書物は、まさしくそれにふさわしいものとなっているのである。言うまでもなく、この譯業は、『文選』研究に新たな地平を切り拓く、まさに偉業と呼ぶにふさわしい仕事と

なろう。もはや贅言は不要である。陳腐な贅辭を連ねる前に、讀者が直接この書物を繙かれるよう、そろそろ筆をおくことにしよう。

最後に、翻譯という行爲がいかに創造的な営みになりうるか、我々はこの書物によって改めて知ることができた。感謝のことばをもって、結びにかえたい。

(京都大學 齋藤希史)

(京都大學 谷口 洋)

(京都大學 原田直枝)

〔付記〕本書評は、谷口、原田、齋藤の三名が分擔執筆し、最終的に齋藤が調整をおこなった。書評にあたっては、第一卷を會讀形式で通讀・検討し、第二卷は分擔方式をとった。なお、第一卷の會讀には興膳宏教授の參席をおおぎ、數々の助言をいただいた。記して謝したい。なお、Knechtges氏の *The Han Rhapsody* については、小川環樹先生による書評が『東方學』第五十九輯（「海外東方學界消息」）に掲載されている。